

からす新聞

第15号



illustrated by Yuka Okaya

発行所 東京都中野区中央5丁目1番2号西田ビル4階 〒164-0011 からす新聞本社 電話03-3382-5963 ©からす新聞本社
 からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

世紀末だから、といつわけでもないのだらうけれど、近ごろ、いわゆる超常現象がマスコミに取り上げられる機会が増えている。肯定派、否定派、そして無関心な人々と、反応は様々であるのが、孰れにせよ、それなりの視聴者や読者を集めていることは間違いないようだ。

みなさんは、SETI(the Search for Extraterrestrial Intelligence)プロジェクトを御存知だろうか。直訳すれば地球外知性の探索といふことになる。平たく言えば、何のことはない、宇宙人探知である。と言っても、これはお遊びや冷やかしの類ではなく、きちんとした調査を旨としたもの。

宇宙には定期的に電波が存在しており、その平均値もわかっているらしい。そこで、宇宙の電波の状態を調べて、平均値から逸脱していると言えそうなものをみつけよう、そこには何らかの単なる自然ではないものが存在するはずだ、というのが、そのあらましのあらましである。こう書くとも簡単なのだが、実は、収集する電波量も膨大なら、解析すべきデータも自ずと膨大になり、大学や関連機関のコンピュータをフルに活用しても追いつかないようなのである。単純な話、処理すべきデータに対して計算機が不足しているという状況だ。この問

題を少しでも緩和しよう、SETI@home 無理矢理訳せば、おうちでSETI、あたりだろうか(笑)という、極めて現代的な案が採られた。世界はすっかりインターネット・ブームである。そこかしこにパーソナル・コンピュータが散らばり、その多くが何らかの形でネットに接続できる状態にある。しかしながら、個人がそれらを実際に使用している時間など、ごくごく限られたものでしかない。企業や大学で使っているものにしても、空き時間はたつぷりある。それらを有効利用しよう、というのがこの計画だ。詳細は省くが、コンピュータを稼働させておく電気代と接続する料金だけ(実に微々たるものである)を負担すれば、誰もがこの壮大な宇宙人探知計画にボランティアとして参加できるのである。

宇宙人好き(会ったこともないのに、こういうのもおかしな話だが...)の私は、当然、参加している。現在のところ、延べ四〇〇時間ほど費やして十三回分のデータ処理を行った。と言っても、煩わしいことなど微塵もない。このプログラムは、コンピュータを使用していない時間に勝手に動作してくれるので、私がやらなければならぬ作業はほとんどない。しかも、万が一、我が家で計算したものが発見に繋がった場

(八面に続く)

今日の紙面

- 二面(オーラ面) 松本と話を、ピン、ボン、パン
- 三画(芸術面) レイズ・キャラー
- 四面(からすみの通信) なせ山にのぼるのか?
- 五画(アメリカレポート) ヤンヒボのピバニヤ
- 六画(詩面) みんなの詩
- 七画(語面) 「はい、はい、はい」
- 八画(トビックス) 波田先生だ

からす新聞は学習塾カラーズが母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行している新聞です。誰でも自由に参加できます(無茶しやない範囲で)。



松本と話そう。ピン、ポン、パン

ひらめかないでいる。

イタリア、スペイン、などが実は最初ひらめいて、つぎにパリだったのだが、実はもう既にパスポートの期限が切れていて、また獲得する頃にはもう仕事に戻らなくてはならず、流れた。それで、日本内でどっか、とひらめきを受け入れんとしているが、なかなかやって来ない。で、そうしているうちに、もう1週間のバカンスが始まろうとしている。

バカンスって真空とか、無とか、本来そう言う意味なんだから、今、まさに心はバカンスである。いや、そうじゃないな、ひらめきを受け入れんとしてる、なんて言う状態は、バカンスじゃないな。欲がある。ひらめきは無心から出るんだらうから、こんなんじゃひらめくはずもない。でも、欲をなくそう、なんていうのもこれも欲である。うん、だから、欲が有るならあっていいし、無いなら無くていいし、好きにしよう。そうすれば、時間的なバカンスも同時に付いてくるだらう。ああ、何言ってるんだらう。

まずは、東京から動きたい。いま、オレの体内細胞の一つ一つは、違うリズム、違うバイブレーションを欲しがっている。そして、それは、原始的というか、本能的というか、そういうものを強力に放っているものであるようだ。となると、オレの場合決まって南なんだよな。そりゃそうか、熊本という南国で、精子と卵子が結びつき、オレの原形ができあがったんだから。

そういえば、南国で、精子で思い出したんだけど、こないだ電車で週刊誌の中吊りに書いてあったことなんだが、東京の成人男性の精子の数が、九州の連中のと比べると2分の1というデータがでたんだって。それを買ってちゃんと読んだわけではないんで、どこのもので、どれほど正確か知らないが、分かる気はする。他県は分からないが、熊本の若造どもは、ギラギラしている。まさに、豚骨スープだ。それは、連中の生命力がもたらしているように思える。ちなみに、ゴキブリもそう。しかも、やつらは叩いても簡単には死なず、飛んで立ち向かってくるものさえる。そういえば長寿率や、出生率は南の県が高いという厚生省の白書にもでてるもんな。きっと、そうなのだらう。将来、たくさん子供が

欲しいよい子のみなさん、九州の男と結婚しよう。

これは、女性にもいえるかもな。最近、マスコミが言うには、不妊症が増えてるらしい。(マスコミなんて一番当てにならないんだが。)子宮内腺症などといった婦人科系の疾患の増加と関係があるらしい。それで、なんかのときに、うちの親父が産婦人科医なもんで、そんな実感はあるか、なんて聞いてみたら、のんきに「いいや。」という返事が返ってきた。これは、どっちかが間違っているかもしれないし、両者とも正しいかもしれない。で、オレは、両者とも正しいと思う。マスコミの情報は全国に届くが、それは東京発だから、ネタも東京ものになってしまう。西麻布を猿が騒がせているのをうちの母親でも知っていた。都庁にカミナリが落ちたのも知っていた。そう、不妊症が増えているというのも、東京のことなのかも知れないのだ。東京に関して言えば、正しいということになるのだ。あと、熊本の出生率の高さからすれば、婦人科の疾患が熊本で増えるとは思えない。つまり、うちの親父の実感も正しいということになる。

それにしても、なんでなんだらうね、これは。いろんなことが関係してるんだらうな。食食物、水、空気、電磁波、精神状況、価値観。オレはこのなかでも、精神状況のファクターが最も強い気がする。生きていたい、という明確な意志が意識的な部分であれ無意識的な部分であれ、希薄になっているように思える。それが、肉体的現象としてあらわれているのだらうと思う。いうならば、無意識のうちの、消極的自殺である。とはいえ、これは、いかにも人間的な現象にも思え、決して価値的にネガティブなこととしてとらえきれない。

しかし、面白いよね。しばらく前までは都市人口の過密化、農村人口の過疎化の問題がとやかく言われてきたが、今度は立場が逆になっちゃうかもね。

でもまた、ずっと時間が経つとまたなんか他の理由で、その逆が逆になるに違いない。世の中、どうやら、生命体の呼吸と同じく、止むことのない、吸う、吐くの繰り返しで成り立っているようだから。止むときは減ぶるときなんだらう。

ようし、まずは、東京駅に行こう。そして、東海道線に乗るか。そして、南西の方向へ向かうか。いや、やっぱ、羽田に行こう。小笠原へ飛ぶか。楽しみだ、明日はどこにいるのだらう。

てなことみなさん、たぶんこれからブラブラしてきます。お仕事、お勉強、頑張ってください。

梅雨の由来は、梅の実が熟すころに降る雨、ということであつた。

中國料理

コウテンエン ユウコウエン
廣天園 裕香園

好吃好香



Ken-ichi Shinozaki, architect

5-12-3 Asagaya-Kita, Suginami-ku, Tokyo,
Telephone & Facsimile: 81-3-3223-0456;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp

篠崎健一アトリエ

Rei's Gallerly



多重人格

(左ページからつづく)

グループである。当然最後に1ドル50セントを払って地下鉄へ入れてもらったのは言うまでも無い。「オレの名前はサムだけ！」本当かどうかは定かでは無い。

地下鉄の構内に一度入ると改札から出ずに全ての路線に乗る事ができる。当然乗り換えの通路も入り組んでいて完全に迷路と化している。一度ホームまで降りてから違う路線に行こうと思い長い連絡通路を歩いていると、先から非常にテンポの良い音が聞こえて来る。またもや、好奇心をかきたてられ早足で音源に向かった。地下道では同見てもジャマイカンの格好をした上半身裸の×××がパーカッションだけでサンバを演奏している。その横でこれもジャマイカンの格好をしてサンバを踊り狂っているオパハンがいた。驚くのはそのどちらもめちゃめちゃハイレベルなのだ。どうみてもカッコイイ。これらも写真に収まるのは大好きなようだ。

ここまでで、今回の予定行数に達してしまっただけで続きは次号にしよう、記憶が一ヶ月続けばだが、、、、。

(不穏当な表現があったため、一部伏せ字にしました。からす新聞社)



ヤンヒポの
ビバ
N.Y.

か・く・れ・み・の

自問自答

つ・う・し・ん

どうして山に登るの？

実際によく聞かれることですが、そこに山があるから、と答えて納得してくれる人は、滅多にいません。うかつにも子供にそう答えてしまった時なんかは、「じゃあ、ビルは」とか「じゃあ、でんちゅうは」と、突っ込まれて大変でした。

答えは、ビールがおいしいから、かなあ。これは嘘ではないし、この一言で、その理由のほとんど全てといっても、言い過ぎではないでしょう。でも本当のところはというと、自分でもよくわからないというのが、本当です。

どうして、あんなことしたのかしら？

例の全日空機ハイジャック事件を知ったのは、東京から少なくとも、2時間は電車に乗り、その後、2時間はバスに乗り、その後、10時間は歩かなければたどり着かない山の中でした。なんと、そんな所でも、テレビ放送(衛星)をみることが出来るのです。みることが出来るといっても、放映されるのは、夕食後のわずかな時間(基本的には7時前後の天気予報)なので、そこから得られる情報は、ごく僅かです。NHKのアナウンサーの言葉をかりて具体的にいうと、

「全日空機がハイジャックされ、犯人は逮捕されましたが、機長が刺されて死亡しました。」

さて、あなたが作家だとしましょう。この3つの事柄を含めてつくりだせる物語は、幾つありますか？ たぶん10や20じゃ、効かないでしょう。当然、山小屋の宿泊客(十数人)が、総脚本家化したことは言うまでもありません。ひとりひとりが、その豊かな想像力と、旺盛な好奇心とでつくりあげた物語を好き勝手にしゃべっています。ちなみに私のはというと、新盗聴法にいきどうりを感じた犯人が、この法律の撤廃を求めて旅客機をハイジャック。必死の説得にまったく応じない犯人に、業を煮やした警察が突入。追い詰められた犯人は、機長を刺して自分も自殺を試みるが失敗、逮捕。全くのでたらめなのは、皆さんご存じの通り。巷のもっぱらの話題は、容疑者の動機や人物像。どうして？、なぜ？、なんのために？、という声が、あちらこちらで聞こえてきます。そういえば一年前の今ごろも、和歌山の辺りで同じような現象がありました。これらの疑問に、パーフェクトに答えられる人は、いないでしょう。本人にしても・・・。

飛行機を操縦してみたい、と思う(思ったことがある)人は少なくはないでしょうが、ここまでする人は多いとは言えません。話はそれです。

が、最近、何年振りかに野球をした時のこと。自分では、とれる、と思ったボールがとれない。自分では、走っているつもりが、転んで。理想と現実、なかなか一致しないものです。年をとるにつれて、頭はでっかくなりますが、肉体は確実に退化しているようです。

しかし、現実を認識する、ということは、そう悪いことではありません。例えば、テストで50点とりました。この事実だけでは、大して喜ばしい数字とはいえませんが、前回は30点、という事実がそこにあったならば？ 問題は、何もしないで30点が50点にはならない、ということ。何にせよ、ゲームばかりしていても、パイロットにも野球選手にも大工さんにも、なれません(きっかけには、なりますが)。

大家さんが新聞を持ってやって来ました。アトランタで、デイ・トレーダー(インターネット上で株を売買する人)と呼ばれる職業の人が、銃を乱射したようです。デイ・トレーダーは全て大悪人、の如くのたまわる大家さんの言葉を聞いていると、どうしてあんなことしたのかしら？、と神妙な面持ちで、テレビに映っているおばさんタレントの方が、まともに見えるから不思議です。

またまた、どうして山にのぼるの？

やはりよく解かりません。はっきり言って辛いことばかりです。ノドはカラカラ、ヒザはガクガク、意識も朦朧としてきました。あれ、でも何だか変だな。こんなに死にそうなのに、こんなに生きてるって感じ。この充実感、一体、何なんだろう。山頂は、まだまだずっと先の、ずっと高いところにあります。ちょっと休憩しましょう。疲れたら、立ち止まって休んでみることも、大切です。あまり休憩が長いのも、考えものですが。

そろそろ、ひとり物思いにふけるのも、飽きてきました。誰かと話をしたい気分です。結局のところ、私は自分のことも他人のこともよくわからない、ということが、よくわかりました。でもそれは、そう悲観することではありません。もし仮に私が、解けない謎などなく、他人の心まで読めてしまうような超人であったならば、それはとても孤独でつまらないことのように思えます。私の頭の中は、疑問と希望と反省でいっぱい。わかっていることは、たまに？酒を飲んで、とてもわかった(わかりあった)ような気分になるあはれは、錯覚だと思いつつ、また飲みに行ってしまう、大馬鹿者の中年(33歳)男性ということだけです。

ヤンヒポの ビバ N.Y.(1)



Viva!
New York

さて、前回は伏せ字削除の対象になってしまったようだが、今回はなるべく編集各貴兄の手間を煩らわせ無いようにしたいと思う。、、、のだが。

時刻はEST(東部標準時)午後11時過ぎ。現住居のL.A.とはゆうに3時間の時差が有る。だから体はまだ夕方8時なのだ。予定より2時間も遅れたのは今年一番のサンダーストームが猛威をふるい全ての航空機を足止めしたためだ。おかげでこちらはシカゴのオハレ空港内の滑走路で立ち往生する羽目になった。予定より遅れて到着した先はその名の通り「THE NEWYORKER HOTEL」という一泊\$140の由緒有るホテルだ。そう、ここはアメリカ合衆国、ニューヨークはマンハッタンなのだ。

その町を知るには深夜に限る。当然光の中では見えない物、真実の世界があるはずだ。部屋へチェックイン後、荷物を置いただけで夜のマンハッタンへ調査に出かけた。細かい地理を説明するのは省くが完全に暮盤の目になっていて東から若くアベニュー(番街) 南から若くストリート(丁目) になっている。ホテルの所在は8番街と34丁目の角に有る。ティファニーの本店は5番街と57丁目の角、ホテルから歩いて約20分、ブロードウェイ街の中心であるタイムズスクエアは7番街と45丁目の交差点。歩いて10分弱の距離だ。

ぐるっと回ってタイムズスクエアについては大体午前0時半過ぎ。ここは新宿と同じく夜通し人並みが絶える事は無い。日本企業の広告ネオンが光り輝き刺激を求める世界中の観光客でごった返している。やはりヤンヒポとしてはその中に刺激を見いだす事はできず、そこから悪評高き深夜の地下鉄に潜入することにした。地下鉄の入り口はいたる所に有る。早速発見して階段を降りて行くとすぐさま×××が寄って来た。何かと思うといきなり「1ドル50セントよこせ」と言っている。よくよく話を聞いてみると、地下鉄に乗るにはトークンという専用の硬貨かメトロカード(日本でも同じテレカの電車版)が必要で有り、それらを持って無いならオレに1ドル50セント払えば

オレのメトロカードで地下鉄に入れてやるって事だった。一種のダフ屋だ。しかしそんな事をやっていて連中は儲かるのだろうか。そんな事を心配していても仕方が無いので、取りあえず無難に対処をすべきだろう。まず一番に浮かんだのはこの新聞で有る。やはりこれは美味しいネタではないか、そう思ったとたん口から「お前の写真を撮らせてくれたら金を払う」と言ってしまった。なにせ相手はダフ屋なのだから正式に言うと犯罪者である。そいつらに向かって写真を撮らせろなのだから向こうの態度が急転直下、極で見えるであろうオーロラのように冷たく険しい物になった。当然向こうは「お前はコップかぁ?」ま、当然の疑問で有る。ヤンヒポはすかさず「いや、自分は日本のジャーナリストで真実のニューヨークを探してるんだ。」と釈明。いささか嘘が簡単過ぎた。しかし何事もシンプルな方が良い場合が有る。相手の×××はいとも簡単にOKしてくれたのだ。富士写のデジタルカメラをポケットから取りだし相手に向けて「ちょっと待て」と×××、すたすたと鉄骨の前まで歩いて行きかぶっていた帽子のヘリを前へ少ししたらして一張羅な顔を作ってこちらを見ている。すかさずシャッターを切る。すると取り巻きが寄ってきて「あたしも入れてよぉ」多分ステディらしい。次はアベックで撮影、その後は関係ないヤツまで入って記念撮影の状態になってしまった。なんとも大らかなダフ屋

(右ページにつづく)

質問

クワ

待っているのは
答えじゃない
かたちを見せない運命に
食いつかれまいと
抗いながら 今晩
待っているのは質問だ

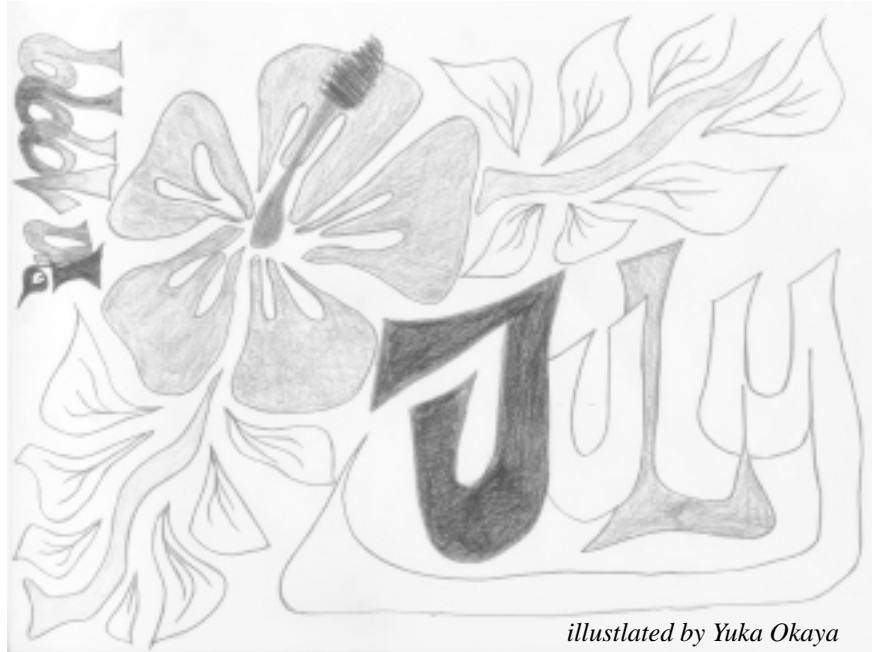
スイッチをひねれば
高層ビルの屋上から
人類が
吐き出されてくる
そのなかから ひとりの
友達を見つげるために
私は目を閉じる

そんな答えは
聞きたくない
それはたしかに
誰かが言っていた
それが誰のことばなのかは
忘れてしまった だが
紙のうえにされるされた
時間のかげに
答えはひそんでいた
私は その謎を
解こうとは思わない

こんなにも不公平な
世界をまえにして
どうして
ひとつのぶつかる質問に
なろうとしないのか

スイッチをひねれば
どんな思いも消してしまえる
どんな窓にも灯りがともる
待っているのは
答えじゃない
待っているのは 質問だ

それは
閉ざされた扉を
ひらく音のように
この世界に響きわたる



illustrated by Yuka Okaya

変身

若尾 喜重

過去に幾度か変身を 試みたがみんな
未遂に終わってしまった
いつでも転職にそなえて身体をきたえてお
かねばならぬ
成功に必要なのは排他的とさえいえる意志
力と強靱な肉体
ます山へ登ろう
自分の肉体が 八十才の老婆だったとは
何もやらないということとは やれば何でも
出来るんだという 甘い幻想に支配され
てなんとも心地好い だから行動などしな
いほうがよい
自分を知ることが けつこく恐ろしいこと
なのだ
自分は自分でしかなく他人にはなれないと
いう不快感を持っている人は いつも変身
にあこがれるのだ

澹色の無

佐藤 良示

夏の宵、窓に寄り掛かりて外景を視る
私の瞳に視る夥しい数の文明の灯り・・・
この大都会という大海原を泳ぎ渡るのに必要
な燈台の灯りを 私は発見出来ない 観えな
い!!
小舟にて鱸を漕げども霪雨に烟る街並
み・・・
灣標は 視界に出現しない!!
私に視えるのは 古里の情景ばかり也
固陋なりし面影なれど 緑と光りが通過する
小さき島・・・
四月になれば 野山に蠢く虫と春の訪れ
人々の心に幸福の渡り鳥が住みつく・・・
六月になれば 光り輝く青い海が夏の訪れを
知らせてくれる
「ごらん!!あの水着姿の子供達を!!」
笑顔と波飛沫の合唱 戯れるその姿に白き積
乱雲が相寄って 怒るのを忘れてしまいそう
八月になれば 秋風が旅人の足跡に吹き抜け
軒下に浮かぶ風鈴と戯れてきゆう鏘の音色を
醸し出す 陽射しを遮断る澹色の無が何故か
静寂の世界へと誘ってくれる
十月になれば十六夜の月が、私の心に宿る。
愛しき女性との思い出を鮮明に蘇らせてくれ
る 時間は短かつたけれど 生涯分培った二
人だけの空間を・・・
秋の風が彷徨い乍ら通り過ぎてゆく・・・
東京という大都会の夏の夜 雑踏の中の孤独
を愛する私は 俗に申すクワい人間なのだ
ろつか?

Yes or No

原点シミュレーション番外編その二

「君は夏が好き？」
 「ええ。(好きだ)」「いや。(好きじゃない)」「これを英語にすると、
 "Do you like summer?"
 "Yes. (I like it)"
 "No. (I don't like it)"

ふむ。なんてことはない。中学一年生の英語である。話題にしたいのは、
 「君は夏が**好きじゃないの**？」と、否定する形で問われたときの返答についてである。日本語ではもちろん、
 「ええ。(好きじゃない)」「いや。(好きだ)」となるわけだが...

せつかくイギリスにいるのだ。世界的評判を保持する英国料理の不味さを身をもって確かめておこうと思う。自らの舌で味わわなくて、英国料理攻撃に加担するわけにはいかぬ。この国とそして自分自身の名譽のためである。

適当なレストランに入って、
 "What do you recommend?"
 「お薦めのものは何ですか」と聞くと、
 "Would you like some roast beef?"
 「ローストビーフなどいかがでしょうか。」なるほど、やっぱりそれしかないか。いつか、イギリスに行ったらローストビーフとフィッシュ&チップス(鱈を揚げたやつとポテトフライ)だけは食べてみる、と言われたことがあるなあ。どうしようかなあ。んー。などなどどうじじじじじり考えつつ、それじゃあローストビーフを...、そう言おうとしたら、
 "You don't eat meat, sir?"
 「肉はお食べならないんですか？」

さて、あなたはここでどう答えるでしょうか。答えは一つです。
 Yes, I do. I don't eat meat.
 No, I don't. I eat meat.
 No. I am a vegetarian.

答えは。「いいえ(食べません)、僕は菜食主義者なんです。」やではどうなってしまうかというところ、
 「いや、食べますよ。僕は肉を食べません。」
 「ええ、食べません。僕は肉を食べます。」あべこべです。変です。日本語との決定的な違いは、**'Yes'が'いいえ'、'No'が'はい'**になっていること。試してみましょう。通じません。[傍点に××が付いているところは、本人の間違った思い込みです]

"You don't eat meat, sir?"
 「肉はお食べならないんですか？」
 "Yes." 本人は「はい」のつもり
 「はい」
 "Yes? So please try our roast beef. The taste is really fantastic!"
 「いいえ？ それではやっぱり是非うちのローストビーフをお試しいただき。そりゃもう、美味しいですよ」

「(はあ？ 何言ってるんだ、こいつ。「はい」って言ったの聞こえなかったのか？ 俺は肉は食わねえんだって...)」

"You don't eat meat, sir?"
 「肉はお食べならないんですか？」
 "No." 本人は「いいえ」のつもり
 「はい」
 "No? All right. How about fish? We have a nice Dover sole."
 「はい？ わかりました。では、魚料理はいかがですか？ 美味しい舌平目がありますよ」
 「(はあ？ 何言ってるんだ、こいつ。「はい」って言ったの聞こえなかったのか？ 俺は肉は大好きだって...)」

といったわけで、
 "You don't like summer?"
 に対する答えは、
 "No, I don't."(ええ、好きじゃないんです)
 "Yes, I do."(いやあ、好きですよ)
 ということになるのであった。

この違いはということなのだろう。簡単に言ってしまうと、日本語は相手本意で、英語は自分本位、と言えるかもしれない。

和を重んずる村社会を育ててきた日本では、多数意見に対して「はい」「ええ」「うん」と言っておけば、波風が立たなくて済む。「はい」とは、「相手に賛成」という意味である。賛成しておけば、当面円満にやり過ごすことができる。村八分にされたら大変なのである。そんな背景があって、相手本意の返答が生まれたのではないだろうか。

これに対して、イギリスを含むヨーロッパでは、集団に個を溶かす前に冷静に主体性を確立せよ、という考え方が昔から強かったように思う。「Yes」は、「自分に賛成」なのである。相手が何と言おうと、自分が好きなら「Yes」、好きじゃないなら「No」なのである。

「サッチーはきっぱりしてるよね」「うん、そうだね」
 "Satchy is decisive." "Yes, she is."
 「サッチーは信用できないよねえ」「ああ、わたしも信用できないね」
 "I don't trust Satchy." "No, I don't trust her, either."

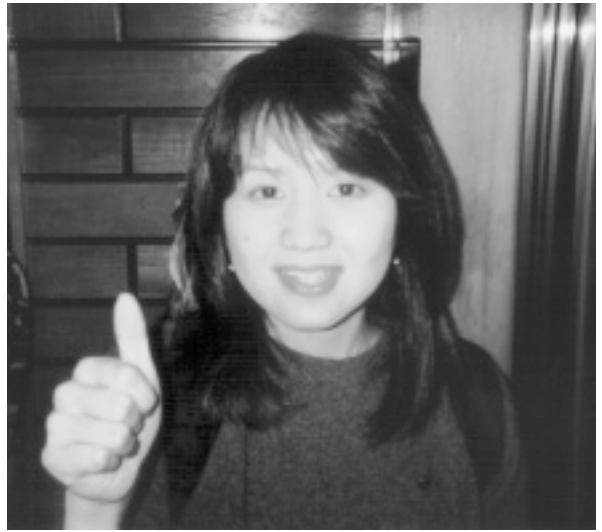
それから「いいえ」は、日本人にとって、謙虚な姿勢で遠慮をするときに重宝だ。やっぱり波風は立てないように、相手に合わせて。

「君は彼女のことは何でも知ってるねえ」「いいいえ、大したことないですよ」
 "You know everything about her." "No, no. I don't know much."
 「君に比べれば、僕は何にも知らないな」「**いいいえ**、あなたはよく知ってますよ」
 "Compared to you, I don't know anything." "**Yes, yes**, you know very well."

もちろん、上に述べたことが現代(そして過去の)全ての日本人の、全ての場面に当てはまる、などと暴言を吐くつもりはない。日英の優劣を論じているのでもない。それでも、農村を基盤に発展してきた日本という社会が、集団になると力を発揮するが、個々人の主体性が弱い、ということは言ってもかまわないように思われるのである。(「思われる」などという控えめな言い方が、いかにも百姓っぽい私の出自はいかにも、百姓なのであった。)

社会の欧米化がさらに進み、**いやおう**否応なしに自分自身の意見立場を明確に示さなくてはならない機会が増えそうな今後の日本。「はい」と「いいえ」はどうなっていくのだろうか。(望月)

波田先生だ



(一面の続き)

はじめまして。波田由紀美(はたゆきみ)です。担当は英語です。

今は先生ですが、かつては私も全太先生の生徒でした。もうあれから10年も経ってしまったんですね。時が経つのはとても早いし、いつ死んでしまうかもわからないので、やりたいことは早目にやっちゃってしまわなければならないなと、最近つくづく思っています。

そこで、今のところ私がやりたいと思っていることは外国へ行くことです。海外へは行ったことはありますが、まだ数か国です。これではまだまだ足りません。もっとたくさんの国へ行きたいんです。できれば食べ物の美味しい国がいいですね。日本では食べられないものを食べて、日本では観られないものを観て、日本では体験できないことを体験する。最高です。

でももっと最高なのは、外国にいと日本にいとときは違った時間が流れていて、私の悩みは、なんてちっぽけなことなんだろって気付くことができるということです。これは大切です。悩むことはとても必要なことですが、人生は意外と短いので、下らないことを長いこと悩んでいたらもったいないと思うんです。

だから私には悩む必要のないことでちょっと立ち止まることはあっても、転んで倒れている時間はないんです。短い人生なんだから、やりたいことをできるだけやって楽しく生きていきたいなと思っています。

合には、私の名まえが発見者の一人として残されるのである。コンピュータが黙々と計算を続ける様を眺めながら、深夜、ひとり、ほくそ笑んでしまつ気持ち、わからなくはないだろう。宇宙人の発見者として名を残そうという邪な願望を除外しても、このプロジェクトは魅力的だ、それが極めてインターネット的なものであるがゆえに。技術的な側面に着目しているのではない。国境もなければ、人種や言語、そんなもの入り込む余地はなく、性別も年齢も問われない。そもそも、宇宙人と対峙する際に肩書きなど、何の役に立とうか。ああ、ここには、現代では稀になってしまった自由と平等がある。

それに、犯罪や誹謗中傷など、ネットも次第に物騒な側面を持ち始めてきている。結果、各種の規制が付き纏つようになってきたり、揚げ句の果てには盗聴法ときた。そこに人間がいる限り、善もあれば悪もあるのは仕方ないことなのかもしれない。けれども、私の好きなインターネットは夢のような場所のままであつてほしかった。そんな子どもじみた述懐一頻り。

ところで、私の立場だが、宇宙人だの心霊現象だの、そんな不可知なものにも極めて肯定的である。楽しめそうなら、かつ、害悪を与えるようなものでないのなら、何でもかまわないではないか。狭量な科学者の戯言に耳を貸す必要などない。

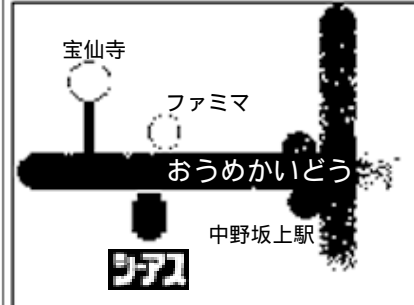
生徒諸君はテストで科学に苦しめられることも屢々であろう。けれども、それだけが、科学の役割なのではない。オートバイやコンピュータ、カラオケや海外旅行など、ぱつと思いつくものを挙げてみても、どれもが先人たちが築き上げてきた成果の上に立っている。現代の生活は、善くも悪しくも、多くを科学に依存しているのである。注意しなければいけないのは、だからといって万端だというわけでもない、と、いつとこ。盲目に暗記した教科書の内容が永遠に変わらないわけではないのだ。今ありえないことも、明日どうなるかは誰にもわからない。それもまた科学なのである。

そう、明日のことはわからないんだ。さあ、どうしよう。すつとぼけて遊ぶもよし、見えぬ明日に向かってもがくもよし。こんなことを考えると、つくづく人間は自由だな、と思う、見えぬものを想像し、見えぬ決断を下すなんて。

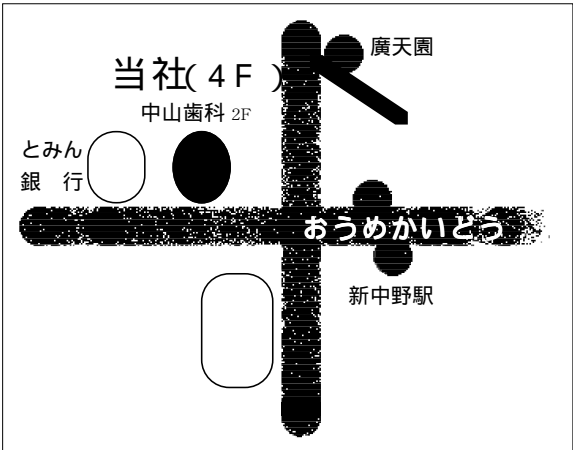
未だ出会えぬ宇宙人のおかげで、忘れかけていた自由と平等を思い出した今日。インターネットの夢が終わっても、心の中にはそんな世界を保ち続けたいものだ。

編集後記
からす新聞第十五号、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発刊予定日は八月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾
リアス
中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451



来社見学を御希望の方は左記のところへ。
丸ノ内線新中野駅 徒歩〇分



(全太)